

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 97 号

平成 22 年 5 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-912-1960

ヒルティ

「眠られぬ夜のために 第二部」

（草間平作・大和邦太郎訳・岩波文庫）より（12）

10月26日

善い事業であればすべてそれに直接関与するということは、必要でもなく、また、できることでもない。ひとにはそれぞれ、特にその人にゆだねられている、限られた分野がある。しかし関心だけならば、この世で行われるすべての善事に対して、これをもつことができる。自分で仕事をするのと、関心をもつこと(すなわち、その仕事を知り、好意をよせ、その成功のためにとりなしの祈りをする)とは、同じではない。しかし、この場合でも、たとえ僅かにせよ金銭を寄付することが、その関心を活発に維持し、その事業にある程度の結びつきをもたせることは事実である。だから、そのために、かようなすべての事業にささげる特別な貯金箱を用意しておくことは、価値あることであり、その上には神の祝福が宿るのである。

10月28日

なにか争いごとの際には、より多く正しいがわの人が、まず、少し譲ってやらねばならない。そうでない相手側は、ゆずることなどとてもできないのが常である。なぜなら、不正というものは、強い奴隷のくさりであって、奴隷みずからそれを断ち切ることは、到底できないからだ。

10月29日

エリシャは言った、「恐れることはない。われわれとともにいる者は彼らとともにいる者よりも多いのだから」。(列王記下6・16)

若い人達に善への勇気を教え込むことができれば、それは現代のあらゆる教育のとりわけよい仕事となるであろう。およそこの要点を欠く教育は、大した意義のないものである。ところが、たとえばわがスイスの学校では、むしろその反対のもの、すなわち、唯物主義の讚美や、単なる世才の謳歌を教えられたきた。だから、われわれは、よりよい道を自分で探さねばならなかった。

11月3日

...「主の祈り」はこれまで唱えられた、そして今後唱えられるであろう祈りの中で、真に必要なすべてのことに対する、最もよい、最も美しい、簡潔な祈りに違いないが。しかし、祈りというものは、あなた自身の感情にぴったりしていて、あなたの個人的な真実の願いでなくてはならない。そうでなければ、むしろ、もっと簡単な「主よ、お助け下さい」という言葉だけを唱えるがよろしい。この言葉も、同じように、われらの主の祈りであったし、しかも、これはおそらく、さきに挙げたいわゆる「主の祈り」よりも、また、われわれが福音書の中で接するよりも、ずっとたびたび、主が用いられたものであろう。

11月8日

わたしはみ言葉を与えられて、それを食べました。み言葉は、わたしに喜びとなり、心の楽しみとなりました。(エレミヤ 15・16)

あなたは人生の最後の段階において、もはやおびただしい神学書やその他の宗教書を読む必要はない。われわれの信仰の原典(テキスト)である(さいわい教科書の形になっていない)四福音書と、その最もよい注釈書である使徒たちの手紙とを頼みとするがよい。ほかの注解書は一切必要でない。旧約聖書と使徒行伝は、われわれの宗教の歴史的な部分として欠くことができない。ことに、預言書の諸書や詩篇はわれわれを非常に励まし慰めてくれる。ヨハネの黙示録を、あなたは一つの幻覚(ビジョン)として、現代においても十分よく理解し、評価することができよう。もっとも、この書は空想家たちによってすでにたびたび濫用され、誤って解釈されてきたが。記された言葉(聖書のことば)は「われらの足のともしび、われらの道の光」(詩篇 119の 105)である。しかもその上、あなたはしだいに内的な個人的な啓示を受けようになるだろう。実際、このような啓示は聖書の言葉とも一致するものであり、また、心よわく感じられるときには、あなたの慰めともなる、記された言葉が即座の用にとりない時にも。エレミヤ 15 の 16。

11月13日

思想や仕事の上で、時にはみのりゆたかな時期があるかと思えば、また時には精神が休息して新しい力をたくわえる冬の季節のような時期もある。あなたは、このような時期を、神からさずけられた休憩期間として、こころ安らかに感謝して受け取りなさい。かかる休憩期間は、人生において時おり現われるもので、死において初めて現われるのではない。死はむしろ新しい、より偉大な活動の始まりであろう。ヨハネ黙示録 2 の 10、ヘブル人への手紙 4 の 9・10。

11月14日

それから、私がアンテオケ、イコニオム、ルステラで受けた数々の迫害、苦難によくも続いて来てくれた。そのひどい迫害に私は耐えてきたが、主はそれら一切のことから、救い出して下さったのである。一体、キリストイエスにあって信心深く生きようとする者は、みな迫害を受ける。(テモテ 3・11,12)

主ご自身、試煉を受けて苦しまれたからこそ、試煉の中にある者たちを助けることが出来るのである。(ヘブル書 2・18)

最も良い時期として思い出に残るのは、しばしば、それに直面しているときには最も苦しく思われた時期である。というのは、その時期に、われわれは成長をとげたか、あるいは、その苦しみがなければいつまでも残ったであろう自分の欠点を脱ぎすてたからである。

11月25日

わたしは命じる、御霊によって歩きなさい。そうすれば、決して肉の欲を満たすことはない。(ガラテヤ 5・16)

キリスト教は、驚くほど積極的な元素(エレメント)である。われわれはこれを、ただの教えとして、永くじっと抱いていることはできない。かならずこれを実際にはたらかせ、またこの霊によって「歩か」ざるを得ない。それとも、そんなことでは満足しないで、あらゆる無益な疑問とか思弁におちいったり、さまざまな公理、儀式、集会などを採りいれざるをえず、これによって心の空虚をまぎらそうとするのである。このような信仰上の道楽者に用心しなさい。そして、もっとも手じかなつとめを果たすがよい、ただし、あなたが希望を寄せている霊によって、すべてをなさねばならない。

1 1月26日

自分以上の高い者に、自分の意志をささげようとしなない人は、真に信じることはできない。それどころか、いわゆる信心ぶかい人であっても、たとえささいなことにせよ、ふたたび自分の意志を持ちはじめるといふや、ふしぎにも信仰はたちまちやんでしまう。ところが、自分の意志と生命とを、彼が信じたいと思う神にささげることにかたく決意した人は、信じることができるし、このことをただちに経験するであろう。

信仰の発足は、そして、その際ただ一つその人に要求されるものは、一つの意志行為である。それから先のことは神がなし給うのである。

1 1月28日

すべてを神に

ときおり勇気がくじけようとも
かたく、かたく神に頼れ、わが心よ
自分の勇気でなしとげたものはなにひとつない、
おのが勇気をたのむな。
そうすればお前の一生の道は転じて、
みめぐみが注ぎ始める。

そうすれば、主のちからはいやまさり、
もはや古きおまえでない
おまえの姿の中で、主がはたらかれ、
闇と光、
人間とキリストとが
ぶっつかり合うことはない。

1 2月5日

ふりかえるな、
なつかしの谷を
ふるき日のよろこびを、
すぎし日の苦しみを。

み空に青く
新しき国は見える、
おまえの手で、あそこに
神の宮をきずこう。

いまはかたく
舵をはなすな、
目標を見失うな、
顔をそむけるな。

ひたすらにすすむ
あこがれのくにへ、
はや霊のひとみに
見ゆる岸边、
神の国は近づく
地はすでに消えた。

1 2月8日

あなたが、ともすると暗い気分になりがちな時には、小さなものに目を向けるがよい。

小さな花、小さな動物、それから（もし健康で天真爛漫ならば）幼児たちも、容易にある種の喜びを呼びさましてくれる。ところが、われわれの出会う大人たちの眼からは、往々、もっと悪いものが、でなくても、生活の苦勞やけわしさが、のぞいている。しかし、そういう時にも、彼らがあなたの眼の中に、もともと上流社会の人におきまりの表情である、あの冷やかな無関心を認めないで、もっとよいものを見てとるように、こころがけなさい。

12月13日

わたしは、むかし年若かった時も、年老いた今も、

正しい人が捨てられ、あるいはその子孫が

食物を請いあるくのを見たことがない。(詩篇 37・25)

詩篇90篇、第116篇、第118篇は、大昔の三つの詩であるが、幾千年を経た今日も、あたかも、人生の多くの苦難にさんざん鍛えられて来た人がその備忘録(メモノート)に昨日記したばかりかと思われるほど、新鮮で、真実味にあふれている。同じく詩篇第37篇(とくに第25節)、第109篇、第110篇は、右の諸篇と補足関係にある。永続的な仕事を果たすべき使命をになった人びとは、多かれ少なかれ、かような人生航路をたどってきた。そして、古い建物の柱石となる代わりに、新しい建物の隅の首石(おやし)となった。ブース大将(救世軍の創始者)はその最近の実例である。

12月18日

あなたは ことに年をとってきたら 言葉の良い意味で気軽に暮らすようにこころがけるが善い。一日じゅう朝から晩まで、あなたの周囲からあなたに対して実にたくさんの要求とか所望とかがもち出される。あなたはそれを、親しげな微笑と「イエス」をもって答えることもできるし、また同様に、多かれ少なかれ無愛想な「ノー」をもって答えることもできる。どちらの答えをするかは、結局のところ、あなたにとっては、たいていまったく同じである場合が多く、それはただの習慣にすぎない。けれどもあのような微笑とイエスをもって答える習慣の方が、もっと大きな、しかし当然よりまねなはずかずの善行などよりも、あなたの家族や、そのほかあなたと交わるすべての人々にとっては、かえって感謝すべきものである。人生の特性を決定するのは、日常の小さな事柄であって、偉大な行動ではない。もともと偉大な行いなどというものは、大多数の人たちにとっては、ごくまれな事柄に属している。

12月21日

人間はときおり、自分にできること以上に、あまりにも多くのことをしようと、しかもそれに対して多くの感謝をも求めたがる。この後者については、エレミヤ書のなかのよい言葉(17の5)がそれを禁じている。ひとは自分にできることをしなければならないが、次には、他人の感謝をあきらめる事が出来なくてはならぬ。でなければ、そういう行いも一種の享楽欲であろう。...

自分がよくなしうる以上のことをしようとせず、また、このような仕事のなかに自分の幸福を求め、かつ、見出す人こそ、最も立派に世を渡る者である。

12月27日

身体が完全に健康だというすばらしい感じは、老年においては、たいていほんの一時的なものであって、からだがすっかり安らいで、暖かなとき(例えば朝のベッドの中か、秋にトゥーン湖畔の陽あたりのよい場所にでもくるとき)などに与えられるが、しかし、そんな時には、時おり、来世の予感かと思われるような、美妙的な気持を覚える。もしわれわれが老年において、このような感じを持ちつづけることができれば、円熟と静かな晴れやかさのこの時期 フランス語の「セレニテ」(晴朗)という言葉の方がこの感じをもっとぴったりいい表している は、実に人生の最上の時であって、いわゆる青春の歡樂も壮年の力も、とうていこれと比べものにならない。したがって、この感情は、決して落日の美ではなくて、むしろよりよき存在への夜明けの光に比すべきものである。だが、やがてすっかり真昼になるころには、我々はこの地上の生活に耐えられなくなるだろう。

これが老年の最上の幸福である。老年の幸福というものは、必ずしもただ家庭のよろこびや、さもなければ思い出のなかにのみあるのではなくて、もっとはるかに善いものでありうるのである。

12月29日

「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい。わたしの父の家には、すまいがたくさんある。もしなかったならば、私はそう言うておいたであろう。あなたがたのために、場所を用意しに行くのだから。そして、行って、場所の用意が出来たならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう。わたしのおる所にあなたがたもおらせるためである。…イエスは彼(トマス)に言われた、「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父の身元に行くことはできない。」(ヨハネ伝 14・1-6)

あなたがここに追い求めている最も美しい死とは、たしかに老年には往々現われるようなたましいと肉体との安らぎの中から、肉体的生命だけがおだやかに尽きること、であろう。

そういうとき、心臓のかすかな鼓動が、ほとんど誰にも気づかれないでとまれば、それで良いのだろう。ただ、この地上の生命を人間のもつ唯一のものだと考える、わからずやの医師が、人為的に刺激を与えて心臓の鼓動をひきのばそうなどとしてはなるまい。

これとは別な、やはり同じように美しいが困難な死は、あきらかに、英雄や殉教者の死である。キリストもまた、少しも弱ることなく、精神力に満ちて、そのような死をとげたのである。

だが、死については、もうこれ以上考えないがよろしい。考えても、なんら有益な結果は生じない。むしろ、生に執着することなく、しかも、人生の任務のために、神のみこころにかなうかぎり生きつづけなさい。これこそ、少しも老人臭さを帯びることもない、最もよい年のとり方である。

そのあとは新しい青春を待ち望むことにしよう。

ヨハネによる福音書 14 の 1 - 6。

1 2 月 3 1 日

最後の登高

最後の嵐が吹きすさんでも
絶頂めざしていさんで登ろう。
これから道は永久に真直ぐだ、
天の梯子（はしご）もはるか上まで見える。

ついに明けそめた朝のそよ風が、
えもいえぬ思いで胸をみたす。
しかしその時どきの恩寵（めぐみ）の豊かさに、
私の心もたましいも夢みごち。

高き栄光よ、ついに近づいた、
年ごろ想ったのとなんという違いか。
けれどもなお長い巡礼の不安な旅路を思い、
いま一度、十分に支度をととのえよう。

現実の危険はついに知らなかった、
わたしに触れたのはただ恐怖の影のみ。
ここまで親しく導きたもうた主よ、
あなたの大みわざをなしとげて下さるでしょうか。

愛はすべてにうち勝つ。(Amor omnia vincit)